

海老原喜之助とエコール・ド・パリ

村上 哲
アート・キュレーション代表

本年 2020 年 9 月、モダニズム絵画の旗手として活躍した海老原喜之助の没後 50 周年を迎えた。1930 年代から 40 年にわたり、斬新な作風で洋画界に足跡を印した鬼才である。1920 年代のパリで一躍脚光を浴び、帰国後の 1935 年に鮮烈なデビューを果たした。鹿児島生まれだが、1950 年からの 11 年間は熊本市を拠点にしている。

海老原喜之助が青春を過ごしたのは、今から 100 年前のパリであった。第 1 次大戦が終結し、平和と活気が戻った 1920 年代、世界各地から多くの芸術家たちが憧れの芸術の都をめざした。1923 年 7 月、フランスに渡った海老原は、パリ画壇の第一線で活躍していた藤田嗣治のもとを訪ねる。当時、藤田は人気絶頂の 36 歳、海老原は血気盛んな 18 歳。以来、「オヤヂ」「エビ」と呼び合う親密な関係のもと、海老原は藤田の薫陶を受けながら、自己のスタイルを模索している。

戦時下の陰鬱さから解放され、自由を謳歌する「狂乱の時代 (レ・ザネ・フォル)」のパリでは、絵画の潮流も多彩さを極めていた。数多の才能がしのぎを削るなかで、海老原は自分ならではの表現を見出だすことの重要性に気づかされる。大戦を経て旧来の価値観が崩壊するなか、強靱な独自性こそが画家として生き残る唯一の武器であった。

パリ時代、海老原は生来の快活さで交友を広げ、薩摩なまりのフランス語を操りながら多くの芸術家と知りあう。なかでもパリで一世を風靡していたキスリングは、日本人画家の憧れの存在であった。藤田の紹介でキスリングの知己を得た海老原は、「アトリエをよく訪ねては、描いて居るのを見せて貰えるようになった」と、随筆「二〇代の記録」に記している。「お前はここにすわって居ると、後方のイスに坐らして作画を続けて、時々私の顔を見ながら、気持ちよくキスリングが筆を運ぶ日もあった」というくだりには、二人の親しげな交流が髣髴とする。

この随想のなかで海老原は、はじめに縦と横の線を描き、艶やかな画肌仕上げるキスリングの画法について語り、色彩の純度を保つために絵筆を頻繁に交換していたと回顧している。当時、多くの日本人がキスリングの影響を受け、艶やかな色彩や簡潔なスタイルに強く感化された。1930 年代、海老原が駆使したピュアな色使いや単純化されたフォルムにも、キスリングの影が色濃い。

絵の魅力にもまして海老原の心を捉えたものは、独りひたむきに制作に没頭する画家たちの姿だった。随筆「オヤヂ」では、「あの人達はたゞたゞ仕事して居た」という記憶が綴られる。海老原によると、藤田は「静かにせつせとアトリエで仕事に終日暮して居た」といい、「夜明け迄のんだくれて怒號して居たキスリングが、よく朝早く牛乳ピンを片手に、仕事に着手して居たのを僕は見た時も驚いた」と回想する。孤独な奮闘のなかで画家たちを鼓舞し続けたものとは、他者とは異なる世界を築こうとする気概に他ならなかった。

海老原の最初のフランス滞在は、1923 年から 1933 年までの 10 年間に及んだ。このエコール・ド・パリの時代に、藤田やキスリングのほか、ブリューゲルやアンリ・ルソーなど古今の多様な成果を吸収しながらユニークな作風を切り開き、彫刻家のジャコモッティや画家のカンピーラとともに注目された。とりわけ清冽な「エビハラ・ブルー」はパリの美術界で絶賛され、エコール・ド・パリの若き世代として脚光を浴びることになった。

第 2 次世界大戦中、故郷の鹿児島から水俣の湯ノ見に疎開した海老原は、人吉に 5 年間暮らしたのち 1950 年には熊本市に移る。そして 1951 年の春、熊本市南坪井に「海老原美術研究所」を開設する。「エビ研」と呼ばれたこの場所から、宮崎静夫、春口光義、板井榮雄、芹川光行、藏本朝美、山口輝也、矢田道也、淵田安子、そしてパリで活躍した森山裕之ら、個性豊かな画家たちが輩出された。型にはめることのない情熱溢れる海老原の指導のもと、弟子たちはそれぞれにオリジナリティーに富む画風を拓く。芸術の都が育んだ独創性への讃歌は、海老原を介して 30 年の時を超え、戦後の熊本に清新な風をもたらしたのだった。

1920 年代のパリには、フランス革命以来の「リベルテ = 自由」があったと追慕していた海老原。伝統に抗うその精神こそが「未知への前進の原動力である」と語った画家は、晩年の三年を再びパリの空の下に暮らした。エコール・ド・パリの時代から 1 世紀、来年 2021 年の 4 月には「海老原美術研究所」が誕生して 70 年目の春が来る。

(むらかみさとし／比較芸術学、キュレーター、ミュージオロジー)

※本稿は、熊本日日新聞に掲載された『ブルーの軌跡―海老原喜之助没後50年』[4]（2020年7月25日）に寄稿した内容に加筆修正したものです。

村上 哲／むらかみさとし

1957 年、熊本県出身。東京藝術大学卒業。熊本県立美術館学芸課長を経て 2018 年から現職。海外展の企画統括・監修に携わる。専門は比較芸術学、エコール・ド・パリ研究、ミュージオロジー (美術館運営学)。現在、熊本県美術家連盟理論部門委員。

MEMO

「エコール・ド・パリ」 (= パリ派／École de Paris) 1900 年代初頭から 1920 年代にかけて、パリで活躍した外国人芸術家たちの総称。モディリアアーニ、キスリング、パスキン、藤田嗣治 (レオナルド・フジタ) など。その多くはユダヤ系で独自のスタイルを築いた。